

日本におけるデフラグビーの普及に関する研究
Research on the popularization of Japanese Deaf Rugby

1K08A004 赤澤祐太

指導教員

主査 間野義之先生

副査 石井昌幸先生

第1章 背景

現在日本には約336万人の身体障害者が存在する。その中で聴覚障害者は約36万人と見られている。政府は「障害者基本計画」を制定し、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う「共生社会」の理念の下に、障害のある人が、社会の対等な構成員として人権を尊重され、自己選択と自己決定の下にあらゆる活動に参加・参画できる社会の実現を目指している。

聴覚障害者スポーツの中でも、デフラグビーは新興スポーツである。

日本におけるデフラグビーの取り組みは、1994年に「日本聴覚障害者ラグビーを考える会(JDR C)」として発足し、2006年にJDR Cから日本聴覚障害者ラグビー連盟(JDR U)に変更した。

デフスポーツのチームでは聴覚障害者と健常者が混在することが多いためコミュニケーションの問題が生じる。しかし、普及を進めることで、デフラグビーの人口増加のみならず、聴覚障害者と健常者の「共生社会」を育む効果も期待できるだろう。

第2章 研究目的

本研究では、国内のデフラグビー人口を増加させるため、日本聴覚障害者ラグビー連盟(JDR F)の普及活動の方向性に関して、課題を明らかにすること、またデフラグビーの歴史、ルール、プレイヤーの実態について把握し、デフラグビー普及のための方法を検討することを目的とする。

第3章 研究方法

1 日本におけるデフラグビーの歴史

日本におけるデフラグビーの歴史、デフラグビーのルール、また、ろう者と聴者のラグビーの違いについて参考文献やインターネットを元に調査を行った。

2 国内デフラグビーの活動状況

日本聴覚障害者ラグビー連盟の広報である柴谷晋氏にインタビュー調査を行った。

調査内容は、デフラグビーチームの現状、デフラグビーへの参加とコミュニケーション、日本聴覚障害者ラグビー連盟について、指導者の有無、練習頻度、内容、選手・サポーター募集方法、普及・育成活動、今後の目標である。

第4章 結果

国内のデフラグビーの状況は東日本、西日本の2チームが存在するのみで、選手数も30名程と少なく十分な普及がされているとはいえない状況だ。

しかし、普及のためのイベント開催や、子供を対象にしたデフラグビー教室、また積極的にメディアへの登場機会つくるなど地道な普及活動を行っており、データとして取ることは出来なかったが認知度は上がっていると考えられる。

また、JDR Uは2019年にデフラグビー世界大会の日本開催を計画している。

日本ラグビー協会(JRF U)はすでに2019年に日本で開催が決定しているラグビーワールドカップに向けて、ラグビーファミリー(選手、ファンだけでなく、それを支える人々を含む、ラグビーに関わる全ての人を指す)の増加と国際競技力向上のための育成強化を行っている。今後JDR Fと強固な関係を築き、積極的な普及・強化活動を行うことが重要となってくる。

第5章 考察

国内には東日本と西日本の2チームが存在するが、選手数は両チーム合わせて30人程度と、ラグビーに必要な15人という人数から考えると極めて少ないといえる。

また、ラグビー関係者だけでなく、聴覚障害者スポーツに関わる人達にデフラグビーに興味を持たせる必要があると考える。他競技との積極的な関わりを創っていくことが重要になってくるのではないだろうか。

例えば、デフスポーツを集めたイベントや、その他の障害者スポーツとの合同のイベントなどを通してデフラグビーを知ってもらうことが出来れば、選手やサポーターの獲得に繋がると考える。

最後に、聴覚障害者に対する医療の不備や、聴覚障害者ゆえに集団スポーツがやり難い環境というのも解決して行かねばならない。障害者スポーツが普及することで、障害者や障害者のための環境について考える機会を増やすことが出来れば、社会的に大きな意義のあることだと言えるだろう。

